トム・ウェッセルマンのアッサンブラージュにおけるメディア機器とその効果――1960 年代ニューヨークのメディア・アートとの比較から

岡本眞那（青山学院大学）

トム・ウェッセルマン（1931-2004）は、アメリカン・ポップ・アートを代表する芸術家の一人である。彼はこの動向の黎明期にあたる 1960 年代初頭において、雑誌や広告から切り取った大衆的なイメージをカンヴァスに貼りつけたコラージュ作品を制作していたが、その後すぐに時計や扇風機、テレビといった日常生活でよく目にする製品を直接作品に用いたアッサンブラージュ作品へと移行する。作品に使用された立体物のなかでも、とりわけラジオやテレビといったメディア機器に注目すると、ウェッセルマンは当時、リアルタイムで放送された音声や映像を展示中に流しており、ここには大衆性をほのめかす記号以上の機能が意図的に付与されていたと言える。本発表では、アッサンブラージュ作品におけるこうしたメディア機器の使用について、それらが鑑賞体験にどのような効果を及ぼすのかという観点から論じる。

ウェッセルマンのアッサンブラージュ作品に関する研究では、ポップ・アート初期の批評家ルーシー・R・リパードによる大衆文化からのイメージの引用を強調する見解に始まり、その後マーコ・リヴィングストンらによるフォーマリズム的解釈、すなわち、ウェッセルマンのアッサンブラージュはもっぱら色彩と形態への関心から制作されたものであり、エロティックな女性表象や大衆文化の流用に批評的な意図はなかったとする論が展開される。これは、1980 年代に出版・公開される自伝やインタビュー等の芸術家本人による言説によってより強固なものとされていった。

しかし、ウェッセルマンは上述の言説のなかで、作品のフォーマリスティックな側面を強調する一方、放送されるラジオの音声や偶発的に変化するテレビ映像によって生まれる効果への関心を示していた。これらは大衆的な日常を想起させる視覚的モチーフであるだけでなく、聴覚や時間経過をも含めた総合的な鑑賞経験を生み出していたのである。こうした特質はポップ・アートの文脈外で同時代のメディア機器を使用した芸術作品と一定の共通項を有している。例えばロバート・ラウシェンバーグは、ラジオの放送によって絶えず更新され続ける情報や時間性に関心を向けていたし、ナム・ジュン・パイクはテレビを単なるオブジェとして捉えるのではなく、その映像そのものを芸術作品の素材として取り込んだ。したがって、彼らはそれぞれのメディア機器が備える機能、すなわち音や映像の変化、放送されることによる偶然性といった効果を作品に利用し、新たな芸術のありようを示したのである。

本発表では、こうした作品群とウェッセルマンのメディア機器を用いた作品とを比較することによって両者の相違点と共通点を考察する。さらに、ウェッセルマン作品の固有性やメディア・アートとの連続性を検討することで、従来の解釈によって構築されたウェッセルマン像を解体し、交錯する当時の多様な芸術の中に位置づけ直すことが本発表の目的である。